神戸女子短期大学　論攷　58巻　37－47（2013）

－資　料－

短大生の記述力に関する考察
－「被服学」の試験答案にみられる変化－

古　田　貴美子

A Study of Writing Abilities of Junior College Students:
Based on an Analysis of Answer Papers in “Hifukugaku”

Kimiko FURUTA

要　旨

本学「被服学」の授業を担当している2006年から2012年までの定期試験の答案について，記述力に変化が見られるかを確かめた。記述式の問題の解答について，１枚の答案に書かれている総文字数を年度別に集計し，記述量の変化や得点との関わりを調べた。総文字数の平均値は年々減少し，漢字の誤りや不使用，文字の体裁を整えることなどについても能力の低下が見られることから，記述力が下がっていると思われる。

記述力に関しては文章の組み立てや表現，表記などの基本を学ぶ小学生時期の学習に影響されていると推察されるが，携帯電話や電子メールなど情報交換手段の多様化により文字を書かなくなったことによる影響も考えられる。

キーワード：定期試験　the final examination
答案　answer papers
記述力　writing abilities

１．はじめに

大学生の学力不足が問題視され始めたのは1990年代後半以降であるが，大学における問題点と高校以下の教育の問題についてさまざまな分析が行われてきた[1)2)]。　大学では，導入教育の視点から学力低下問題への対応が論じられ，学力や学習意欲低下の原因究明と課題の検証が行われている[3)]。

一方，短期大学については受験時のランキングや偏差値などの資料が提示されることは少なく，統計的な情報の収集が難しい状況にある。そして，在学期間の短さや卒業後の進路を考慮すると，学力低下への対応として大学とは異なる教育や支援が必要と考えられる。たとえば，入学後まもなく始まる就職活動のために，常識テストなどの試験対策が勉強することなのは明らかである。しかし，履歴書やエントリーシートが書けないことに対して，その理由と程度が明らかではないので，指導がむずかしいことがある。そこで，短期大学生の文章を書く力や意

見をまとめる力，表現力など記述に関して，学力を検証したいと考えた。

2006年から担当している「被服学」の定期試験には毎回記述式の問題を出している。講義のノートを持ち込んでよいとしているが，学生たちは，文章を書くのが苦手で記述式の試験がむずかしいといった感想を述べる。最近では試験やレポートに意見や感想が書けない様子も見受けられるので，現在まで７年間の定期試験の答案を解読し，記述に関する学力が変化しているかを確かめ考察を行った。

２．方法

（１）試験について

「被服学」は，総合生活学科の選択必修科目であり，前期に，週２コマ開講されている。１年次生対象の授業のため，受講者のほとんどが１年生であるが，２年生もわずかに含まれる。各年度の受講者数を表１に示す。履修登録した学生から，受験資格のない無資格者を除き，受講者とした。また，総合生活学科の１年生における受講者の割合はおよそ30％～50％程度である。

定期試験は，どの年度も２クラス合同で，同じ試験を行っている。以下に試験の詳細を記す。

内容　　：15回の講義内容から，ノートに記した内容を中心にした出題
　　記述式の問題を５問（2006年度は４問）

持ち込み：教科書，自筆ノート，配布プリントの持ち込みを許可
　　（2012年度は教科書不可）

試験時間：80分（50分経過後，退出可）

単位認定：定期試験，レポート（授業中の提出物など含む），授業態度を総合評価

採点方針：問題に対する答えは，講義内容の中にあり，自分の意見や感想を書く問題も含んでいるので，平均60～70点くらいを目標にしている。

（２）答案総数

「被服学」を担当している2006年から今年までの受験者全員の答案を精読した。定期試験受験者は総数312名であった。

（３）分析方法

すべての試験答案について，問題ごとに解答文字数を数えた。字の大きさを比較しやすいように，10字ごとに縦線をいれ，原稿用紙の使い方と同じように，句読点,「　」(　)・などはそれぞれ１文字とし，箇条書きでは，句読点のないスペースも１文字とした。英字は半角として数えた。

問題は文章で答えるような問い方をしており，解答としてはある程度の量の文章を書く必要

表１　各年度の「被服学」受講者数

No.	年度	クラス１（人）	クラス２（人）	受講者数合計（人）	２年生受講者数（人）	１年生受講者数（人）	１年生総数（人）	１年生受講者割合（%）
1	2006	16	25	41	0	41	103	39.8
2	2007	16	16	32	1	31	140	22.1
3	2008	19	21	40	4	36	124	29.0
4	2009	8	30	38	5	33	135	24.4
5	2010	25	27	52	2	50	135	37.0
6	2011	16	42	58	5	53	117	45.3
7	2012	13	42	55	4	51	98	52.0

＊学科基礎科目（選択必修科目）
＊中学校教諭二種免許状（家庭科）取得希望者必修科目

がある。ただし，問題と配点が年度によって異なるため，問題ごとの文字数を合計した総文字数により，書いた量を比較し，同じ年度では，得点との関連を確かめた。

また，文章の中で，答案として適切でないことばや表現，誤字にも注目し，抜き出した。

３．結果

年度別の試験得点と総文字数の平均および最大字数・最低字数を表２に示す。各年度とも受験生は１年生が大部分で，２年生は少数含まれるが，特に得点が高いか低いかの極端な例がないため，受験者全員の平均値を求めた。

答案用紙の設問以外は白紙のため，受験者が好きな字の大きさで書いている。多くの答案は１行30字から40字程度で書かれているが，最近は用紙幅の半分ほどで改行する２列の箇条書きも増えている。

平均点については，問題と配点がすべて同じではないので，単純に得点による比較はできな

表２　年度別の「被服学」定期試験平均点・総文字数

No.	年度	定期試験受験者数（人）	得点（点）			総文字数（字）		
			平均	最高	最低	平均	最高	最低
1	2006	41	68.24	90	45	916.1	1442	502
2	2007	31	68.03	87	51	898.8	1323	511
3	2008	40	64.40	83	28	840.0	1253	311
4	2009	37	59.68	89	37	870.4	1451	456
5	2010	51	72.63	93	56	909.4	1670	358
6	2011	57	59.54	84	38	930.8	2023	386
7	2012	55	50.58	84	29	788.4	1410	298

表３　高得点および低得点の答案の文字数

№.	年度	定期試験 受験者数（人）	得点０～39点 平均文字数	得点０～49点 平均文字数	得点70～100点 平均文字数	得点80～100点 平均文字数
1	2006	41	—	530　（ 1人）	1045.9（18人）	1313.5（6人）
2	2007	31	—	—	1038.4（14人）	1124.4（9人）
3	2008	40	427.0（2人）	599.3（ 3人）	957.7（14人）	968.0（3人）
4	2009	37	—	607.7（ 6人）	1151.5（10人）	1400　（1人）
5	2010	51	—	—	1033.9（33人）	1194.7（7人）
6	2011	57	386　（1人）	648.7（ 6人）	1274.0（10人）	1541.0（3人）
7	2012	55	493.3（6人）	632.2（28人）	1184.0（ 2人）	1410　（1人）

＊2006年度は問題数が４問，2007年度以降は５問
＊年度により試験問題が異なるため，得点に幅を持たせ，比較している

いが，2010年には，担当し始めより平均点が下がっていることを意識して，キーワードに対する加点を増やし，意見や感想に多く配点するなど採点方法を変えている。2010年以降はほぼ同じ採点であるが，2012年はまた得点が大きく下がっている。

（１）総文字数と得点の関係

総文字数の平均値を年度で比較すると，2012年が最も少なく，次に2008年である。2008年の平均値が下がっているのは，問題の影響があるのかもしれないが，解答が書けなかった学生が複数あったことと，上位者が少なかったことが理由に挙げられる。この頃は，得点の低い学生は欠席が多いことが認められる。2010年と2011年については，総文字数は増えているが，平均点は下がっている。答えが的確に書かれなかったためと考えられる。

2008年と2012年は最高点と最低点はほぼ同じで，総文字数は50字，１～２行しか変わらない。しかし，平均点が14点も下がっていることから，解答の内容に違いがあり，問題の意味を正しく捉えられなかったことがわかる。

次に，高得点と低得点の答案について総文字数との関連を調べた。年度別に，得点が50点未満の答案の総文字数と得点が70点以上の答案の総文字数の平均値を求め，表３に示す。

70点以上の答案はおよそ1000字以上書いており，80点以上になると，多いものでは1500字以上書いている。1000字は，１問につきおよそ５行（40字×５）である。また，得点が50点未満の平均総文字数は600字前後で，１問につき３行（40字×３），120字程度しか書いていない。出題者からすると，解答が３行では不十分である。

（２）総文字数に見る記述量

年度別に，答案を総文字数が400字以下，500字以下，600字以下，700字以下，800字以下，900字以下，1000字以下，1001字以上に分け，答案枚数全体に対する割合を確かめた。図１に

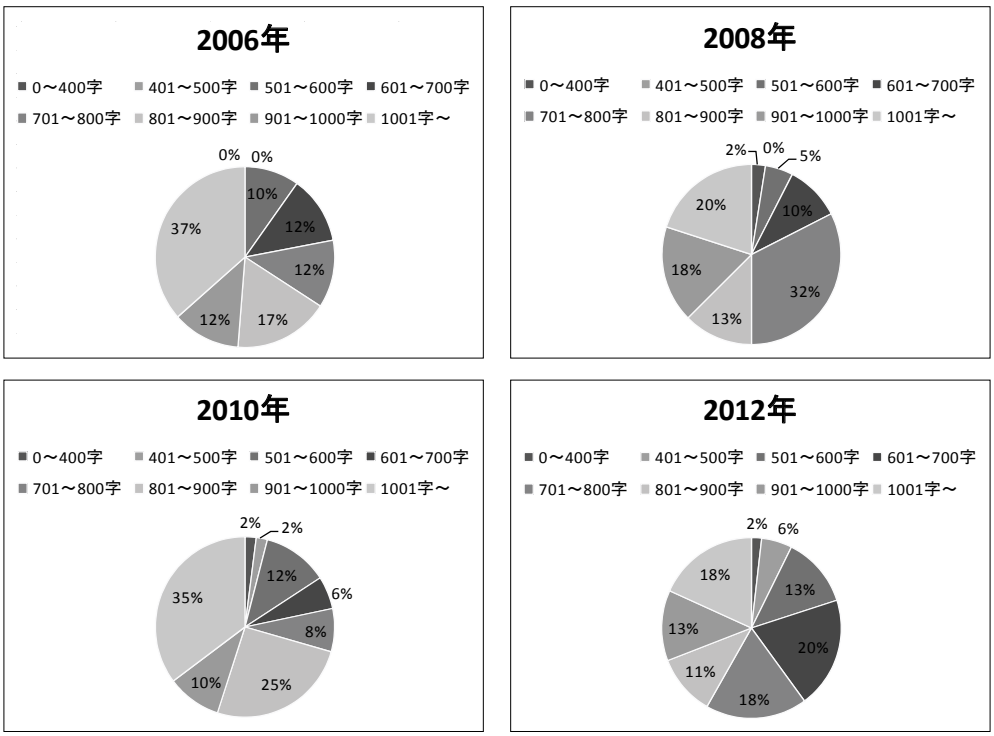

図１　年度別　総文字数の分布

2006年から１年おきに2012年までの，年度別の総文字数の分布を示す。

2006年には，しっかり解答している，すなわち1001字以上記述した学生が全体の３分の１は見られる一方，ほとんど書けなかった500字以下のものはなし，600字以下は10%だった。

2008年では，最も多かったのが701～800字の答案で32%，700字以下が17%であった。

2010年については2006年と全体的によく似た割合になっているが，600字以下が16%と書けない学生が増加している。

2012年になると，総文字数の多い1001字以上が18%に減少し，901字以上と合わせてほぼ３割である。それに対して，文字数の少ない字数帯は増加しており，600字以下は21%である。2011年は2010年の割合とあまり変わらないが，600字以下が６%であった。この結果より，2012年は，特にその前の６年間の結果より大きな減少が見られ，記述力が下がっていると思われる。

（３）答案に見られる変化

2006年から現在までに見られる，記述量以外の変化を次に挙げる。表現と表記に関して不足する能力が目立つようになってきている。

①表現（文体）

2006年と2007年には全員が解答を文章で記述していたが，2008年以降，箇条書きも見られる。また，今年度はノートそのままを書いたと見られる答案が増えていた。箇条書きと文章が混在する答案もある。

②表記（漢字の誤り）

誤字の多さや，漢字を使わない文章を書くこと，話しことばの使用は，2006年から見られる。得点が下位のものに限らず，問題の理解と文章表現はできるのに，漢字は苦手という学生がいる。誤字および漢字不使用の割合を表４に示す。

「被服学」では洗剤と洗濯方法についての内容を扱うので，洗剤，界面活性剤，漂白剤，防虫剤と「剤」の字を書くことはかなり多いが，『済』と書くまちがい率は非常に高い。毎年見られるので，授業中にも注意している。また，全部の「剤」をまちがえるのではなく，一部をまちがえている学生が多数ある。漢字の意味をわかっていないためか，集中力がないためか，理解できないまちがい方をしている。

③表記（漢字の不使用・ひらがなの多用）

漢字を使うべき語句に使わない例を表５に挙げる。10語以上，ひらがなで表記している例からわかるように，小学校で習う漢字をもひらがなで書いているため，読む側は大変読みにくいのであるが，ひらがなを使うのが習慣になっていることも考えられる。下の問題になるほど漢字を使わない答案については，時間がなくなってあわてて書いている状況もあると思われる。

④表記（字の読みにくさ）

2009年以降，読みにくい癖字や小さい字の答案がある。読みにくい字は2009年１人，2010年２人，2011年５人，2012年２人であった。また，小さい字は2010年１人，2011年と2012年は２人ずつ見られた。小さい字は２㎝間に10字すなわち１字がおよそ２㎜角の大きさで字を書いて

表４　答案に見られる誤字および読みにくい字の出現率

№.	年度	受験者数（人）	誤字率（%）* 剤→済	ひらがな使用 ** の高い割合（%）	読みにくい字 *** の割合（%）
1	2006	41	12.2	2.4	0
2	2007	31	32.3	6.5	0
3	2008	40	25.0	7.5	0
4	2009	37	32.4	5.4	2.7
5	2010	51	15.7	11.8	5.9
6	2011	57	3.5	5.3	12.3
7	2012	55	14.5	10.9	7.3

*　洗剤，漂白剤などの「剤」の字の誤りがある
**　漢字を使用すべきことばをひらがなで表記が５語以上ある
*** 小さすぎて読めない字および癖字（悪筆）

表５　年度別の「被服学」答案に見られる誤り例

年度	総文字数平均(字)	話しことばの使用例	誤字の例（　）内が正しい漢字 洗済（剤）・漂白済（剤）〔全年度〕	漢字を使わずにひらがなを使用した例 （１枚の答案に10語以上見られた例）
2006	916.1		標白剤（漂）・着地（生）・紫外綿（線） 同型色（系）・別けて洗う（分）	（ａ）うすぎ・さける・やける・みせる・さむい・すずしさ・あたえる・すいとる・あたたか・このむ・きる・さかん・はこぶ・うける・あらう・まぜる・色おち・ふせぐ・あう・はだ・のこる・ながれる・かう・よごれる
2007	898.8	後，（２人）	洗濯器（機）・注位（意）・洋毛（羊） 確任（認）・＊ウスい（薄）・気侯（候）	
2008	840.0	あと，（３人） 今って あーゆう服	確任（認）・標白剤（漂）・正格（確） 水流い（洗）・溶器（容）・半断（判） 得に（特）・貴跡（遺）・蚕さん（養蚕） 高終（級）・族にいう（俗）	（ｂ）服そう・きる・さむい・しゅみ・半そで・かさね・おび・つかう・うつる・ふせぐ
2009	870.4	なので それか そうゆうの ちがうかった あと	細繊（繊維）・車輪（輪）・危検（険）・ 線（綿）・立体講成（構）・連乾（速）・ ＊ウスい（薄）	（ｃ）すずしげ・すける・きる・つくる・くるしい・かわる・うすい・おれる・ふく・あがる・こまる・みる・うすめ
2010	909.4	なので（２人） あと（３人） 又，	概製服（既）・既成品（製）・成作（製）・ 述惑（迷）・統一制（性）	（ｄ）あつい・おこなう・つくる・かえる・いれる・ほそい・うで・しめる・おきる・えらぶ （ｅ）すずしい・きる・えらぶ・おおきい・つくる・改ぜん・とういつ・おくる・わける・みる・ほうち・はやめ・よぶん・こまかい・あらうなど43語 （ｆ）えらぶ・きる・かさねぎ・はじまり・ふせぐ・すずしい・くばる・おぎなう・かかわる・そのつど・おこる・かわらない （ｇ）えらぶ・もちいる・おきる・みられる・かう・つくる・みつける・うき上がる・とける・おとす・色おち・やぶれ・きる・むし・とじる・きずつけ・，はやる・まきこむ・もつ
2011	930.8	とか!! （語尾に）	確任（認）・低抗（抵）委節（季）・ 線（綿）・人係（体）・通機性（気）	（ｈ）しめる・のばす・よごれ・ふせぐ・おち・かわき・えらぶ・すごす・さす・切りおとす
2012	788.4	そしたら じゃないと	界面法性剤（活）・＊＊コウ素（酵）・ 工風（夫）・委節（季）・回腹（復）	（ｉ）かさね・そで・とおす・せつめい・たかい・じょうぶ・ねむっていた・とりだす・どくとく・かんそうざい・ぼうちゅうざい

＊ウスい…部首（草かんむり）なし
＊＊コウ素…孝→考

いた。字の大きさが小さかったり大きかったりする他，書き始めと書き終わりがそろっていない答案や，左端から書き始め途中で改行したり，２段組みのようにかたまりを作って書いたりと統一されていない書き方も増えている。

図２は，2006年と2012年の最高得点の答案と平均点で総文字数が平均に近い答案である。2006年は問題が４問で，白紙の部分が大きいが，最高得点・ほぼ平均の点数と文字数の答案の両方について，2012年の答案よりも，文字が読みやすい大きさで書かれ，行間がそろっているのがわかる。

（４）2012年の問題点

2012年は特に，前年までと異なる書き方や，理解力に疑問を持たざるをえない答案が見られた。文部科学省文部審議会答申による「国語力を構成する能力」[4)] に照らし合わせて，国語力に関する問題点を以下に示す。

・問題の意味がわからないので，解答できない。
　たとえば，〔～の働きについて説明しなさい〕に的確な答が少ない。【理解する力】
・自分の意見や感想を表すことがむずかしい。【理解する力・表す力】

・不必要なことを書いている。【理解する力･表す力】
・記述式の問題に答えられない。箇条書きや単語の羅列のみの解答がある。【国語の知識・内容構成】
・解答の始まりに問題を繰り返す。【国語の知識（内容構成，表現）】
・主語・述語の整った文章が書けない。【国語の知識（内容構成，表現）】
・句読点があったり，なかったりする。句点がほぼないものもある。【国語の知識（表記）】
・悪筆が増えている。癖字については，へんとつくりの間が字間よりも大きいものもある。

2006年　高得点の答案

2012年　高得点の答案

2006年　平均点・平均字数の答案

2012年　平均点・平均字数の答案

図２　答案の書き方の比較

・字の大きさが答の量によってとても小さくなる。10字を何㎝に書いたかで大きさを測ると１枚の答案に，２㎝～５㎝と大きさにかなり違いがある答案が複数あった。【その他】

実際の答案に書かれた文章の中から問題があると思われる文章を下記に記す。

〈2012年度　答案から〉　主述に問題がある例

問い：あなたの身の回りで，被服に関係がある問題点を１つ以上挙げなさい。

答え：私は個人的に浴衣の着方についてで，浴衣まつりに行った時に肩を露出した着方をしたり，すそを切って短くして着ている人をたくさん見かけました。問題点ではないかもしれませんが，浴衣はきっと，変に小細工をするより，そのままのありのままで着た方が可愛いんだという事を知ってほしいです。

４．考察

現在の短期大学生は，学力低下の大きな要因とされる，2002年（平成14年）以来同じ学習指導要領[5)]の元で，小学生の時からいわゆる「ゆとり教育」を受けてきた世代である。この間，

短期大学の序列にほとんど変わりはなく，調査した2006年から2012年で，入学年による学力の差は大きくないと思われた。

しかし，2012年まで過去7年間の答案を読み比べると，明らかに記述量の低下が見られ，解答も的確とは言えないものが増加している。2006年から数年間は，点数の低い学生は欠席が多い学生であったが，最近は出席していて授業のノートがあっても，書くのがむずかしいようである。記述式の問いに対し，何を答えないといけないのか理解できず，自分で文章をまとめる力にも欠ける。記述力だけでなく読解力が低下している状況にあると思われる。

これには，学校教育が関係しているのではないかと考え，学習指導要領の改正時期との関連を確かめた。ゆとり教育の始まりとされるのが，2002年の学習指導要領[5]施行である。短大生がどんな学校教育を受けてきたのか知るために，当時の年齢と在学校を表6に示す。

2006年から2008年に入学した学生は，2002年当時中学生だったので，小学生のときには旧学習指導要領[6]の元で学んでいる。そのため，誤字などは見られるが，基本的な文章を作る能力や字を整えて書く力は身に付いていたと思われる。2009年以降の入学生は，2002年には小学校在学中であった。2009年頃から読解力と記述力が下がり始め，読みやすく体裁を整えることができなくなってきたのは，小学校の国語の学習の影響もあるのではないかと考える。

学習指導要領の小学校国語科では，改正の度に文言は異なっても，文字に関する事項として書写の項があり，文字の組み立てに注意し，文字の形を整えて書くこと，ならびに文字の大きさや配列に注意して書くこと，が挙げられている[5][6][7]。国語に限らず学習する時間が短くなれば，文章を読んだり書いたりする機会は少なくなり，身に付ける能力は下がると思われる。

今回見直した答案には，字の読みやすさ・大きさ・字間・行間の整っていないものが近年になるほど増加していた。答案は読んでもらうことを意識して書くかどうかで美しさが変わると思われる。社会人になってからも自筆で文字を書く機会は多く，印象を良くする意味で，字の美しさ読みやすさは重要である。授業の中で繰り返し意識づけしたいと考えている。

また，書く力の低下には携帯電話などの情報機器の影響も考えられる。文化庁が実施した平成23年度「国語に関する世論調査」[8]によると日本人の日本語能力が低下していると考える人が増えており，「書く力」が87%，「読む力」が78.4%と特に高く，「話す力」「聞く力」も6割

表6　短大生のゆとり教育開始時（2002年学習指導要領施行時）の年齢

短大入学年	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
生年	1987年度	1988年度	1989年度	1990年度	1991年度	1992年度	1993年度
2002年時の年齢 （完全学校週5日制開始）	15歳	14歳	13歳	12歳	11歳	10歳	9歳
在籍学校	中学校			小学校			

1992年9月～　公立学校　第二土曜日が休日
1995年4月～　公立学校　第二・第四土曜日が休日
2002年4月～　公立学校　全ての土曜日が休日

以上が低下していると考えている。ここでは，携帯電話や電子メールなどの普及により，「漢字を正確に書く力が衰えた」と答えた人が10年前と比べて25％増加し，16歳から19歳では10年前に26.4％だったが，平成23度は48.7％となっている。日常で書く機会が少なくなると衰えるので，いかに練習することが大事であるかを示している。

５．おわりに

昨年，学生から，文章を読んでも理解できないから本を読まない，テレビや映画でも，声がなかったら（表情や動作だけでは）筋がわからないとの話を聞いた。極端な例だと思っていたが，今回の結果から，理解できないことが決して特別なことではないと考えるようになった。学校教育だけでなく，小さい頃からの読書習慣が影響しているかもしれないので，学生の読書習慣や生活習慣を調査し，記述力や読解力との関連を確かめたいと考えている。

筆者は家政系の被服学が専門であり，中学校家庭科の教員養成にも関わっている。家庭科の教科目標として掲げられるのは，生活に必要な基礎知識の理解と技能の養成，それらを活用して課題を解決するために工夫できる能力と態度の育成，家族や他者との協力や理解のもとに自立する力の育成である[9)]。教科としての国語と家庭科は別物と考えられるが，生活の中で考え伝え協調するすべてにおいて基本となるのは『ことば』であり，家庭科や被服関係の授業の中で，国語力を高める訓練はできると考えている。

現在は，授業において図書館で書籍を調べ発表したり，レポートを書いたりと記述する機会を増やしている。今後は，記述力を含めた学力向上のための取り組みについて，学生への指導とその結果の検証を行う予定である。

引用文献

１）沖裕貴：「学力低下論争」を振り返って－「現代の教育」の講義と受講生との議論から－，立命館高等教育研究，第11，131－150（2011）

２）Kei-Net：『いま求められる「国語力」とは』
（http://www.keinet.ne.jp/doc/gl/07/11/toku0711-1.pdf）

３）菅沢茂・佐藤勝昭・岡山隆之・桑原利彦：学力低下問題とその対応策－導入教育充実の視点－，東京農工大学　大学教育ジャーナル，03（１），61－83（2005）

４）文部科学省，文部審議会答申：これからの時代に求められる国語力について
（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/toushin/04020301/015.pdf）

５）文部科学省：学習指導要領（1998年改訂）

６）文部科学省：旧学習指導要領（1989年改訂）

７）文部科学省：新学習指導要領（2008年改訂）

８）文化庁：平成23年度「国語に関する世論調査」の結果の概要
（http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/.../h23_chosa_kekka.pdf）

９）文部科学省：中学校学習指導要領解説　技術・家庭編（平成20年９月）

参考文献

10）政府広報オンライン：学習指導要領が変わります（http:// www.gov-online.go.jp）
11）文部科学省：全国的な学力調査（全国学力・学習調査等）
（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/）
12）文部科学省：PISA（OECD 生徒の学習到達度調査）
（http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/pisa/index.htm）
13）坂本　芳明：小学校国語教育の課題－学生の言語表現力から－，北海道文教大学論集，第12号，39－48（2011）